

平成29年度第1回北海道病院事業推進委員会 議事概要

1 日時及び場所

平成29年6月16日(金) 16:30~18:30

道庁別館4階 道立病院局会議室

2 出席者

(委員) 佐古委員長、池田委員、谷口委員、土橋委員、旗本委員
(道側) 鈴木病院事業管理者、田中部長、立花局次長兼人材確保対策室長、
叶野局次長、佐藤課長、野崎課長、小俣経営改革指導官、
道立病院局各主幹及び各主査 ほか

3 議事概要

(1) 報告事項

北海道病院事業推進委員会の設置条例の改正について

- ・事務局より説明を行った。

(2) 議題

① 平成28年度 道立病院経営状況・取組実績について

② 平成28年度 新・北海道病院事業改革プラン点検・評価書(自己評価)について

- ・事務局より説明を行った後、質疑応答、意見交換が行われた。

4 委員の主な発言

- 看護師の1年間の勤務日数が多い場合、病棟配置が必要な看護師数を見直すことも可能となる。
- 外来専属の看護師など、様々な勤務形態について検討してはどうか。
- できることはすべて実施している印象だが、医師確保だけができていない状況。赤字を削減する必要条件となるため、継続した医師確保対策を行うこと。
- 後発医薬品採用率について、全国の病院では平成33年までに80%を目標とすることから、80%以下を目標値としている病院は、もう少し高い目標を設定する必要がある。
- 医薬品及び診療材料の単価契約について、自治体病院だけではなく、民間病院も含めた購入額を活用したらどうか。
- 江差病院について
 - ・ 外科医の配置により内科の診療範囲が拡大することから、外科の医師確保に最大限努力する必要がある。
 - ・ 基幹診療科の維持が必要な地域であり、計画的な設備投資の観点から、安定的な

医師確保が必要である。

- 北見病院について
 - ・ 北見赤十字病院との連携においては、患者を主体とした場合、ある程度拡大解釈しながら可能な範囲で相互応援しないと、たぶんうまくいかない、そうあるべき。
 - ・ 看護師のチーム医療としてのカンファレンス等は、スムーズな患者の受け入れに支障が出てくるため、拡大解釈について最大限配慮したほうがよい。
 - ・ 北見赤十字病院とは経営母体が違うので、現状では制限はあるが、連携協議会での意見を十分に吸い上げて、より効率的な運営形態を検討すること。
- 羽幌病院について
 - ・ 医師定数が13で現員数は7となっているが、昨年度実績では医師4人に対して入院患者が27人と非効率的である。病床数による医師の配置はやむを得ないと考えるが、医療機能や医師定数の見直しについて検討すること。
 - ・ 28年度実績では、他院からの紹介患者数が目標達成率157.3%と増加しているため、いい兆候である。
- 緑ヶ丘病院について
 - ・ 個別の数値目標では、目標以上の項目もあるため、さらに目標を上げて改善を図ること。
 - ・ スーパー救急は満床に近い状態で健闘しているが、空床の病床は長期入院患者の退院促進だけが要因なのかを十分検討する必要がある。
- 向陽ヶ丘病院について
 - ・ 個別の取組は向上しており、鋭意に取り組まれているが、同じ精神病院の緑ヶ丘病院と比較して、不足している部分の改善を期待する。
 - ・ 取組目標に病床利用率・稼働率の向上を加えることとし、向上に向けた検討を行うこと。
- 子ども総合医療・療育センターについて
 - ・ 以前、平均在院日数の短縮について、回転率を上げるなら意味はあるが、入院患者の減少による稼働率の低下は意味がない、と伝えたが、結果として不明である。
 - ・ 平均在院日数の短縮と収益の相関性について、マネジメントを担う診療科長とセンター長等により、具体的な内容を含め調整を図ること。
- 医師の処遇など、道立病院が所在する地域の病院と比較すると恵まれていないため、医療従事者の確保に大きな影響を及ぼしている。

4月から全部適用となり、事業管理者を筆頭として、医師を含めた医療従事者の待遇改善等が進むと考えられるが、ただ改善するのではなく、成果に応じた待遇の改善という仕組みを入れてほしい。